SOTO ZEN JOURNAL

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

法眼

ご挨拶　p1
藏山大顕

新総監任命にあたり、ハワイ国際布教の現在までと今後の展望　p2
駒形宗二

大本山總持寺開祖太祖瑩山紹瑾禅師700回大遠忌ツアーの物語　p4
穏辰ランドリー

瑩山禅師のご生涯とご鴻業（4）　p7
横山龍顯

坐禅への脚注集（27）　p13
藤田一照

Number
55
March 2025

ご挨拶

教化部長　藏山大顕
曹洞宗宗務庁

『法眼』55号の巻頭に一言ご挨拶申し上げます。

この度、令和6年10月に曹洞宗教化部長を拝命いたしました、藏山大顕でございます。曹洞禅の根幹である布教教化を担う責任の重さに、身の引き締まる思いでおりますが、その重責に恥じぬよう微力を尽くしてまいりたいと存じます。何卒、ご教導とご法愛を賜りますよう、伏してお願い申し上げます。また、曹洞宗国際センター報『法眼』をご愛読の皆様におかれましては、ますますご清祥のことと拝察申し上げます。皆様にとって、日々の修行や生活がより豊かなものとなりますようお祈り申し上げます。

さて、昨年4月に開催された曹洞宗国際センター主催「世界曹洞禅交流会　Soto Zen World Fellowship」では、『法眼』をご愛読の皆様にも多数ご参加いただいたことと存じます。この場をお借りして、改めて宗門国際布教へのご理解とご協力に心より感謝申し上げます。皆様のご支援のおかげで、このような大切な交流の場を持つことができましたこと、深く感謝しております。私たちが一堂に会し、意見を交換し、禅の教えを共有することは、宗門の発展にとって非常に意義深いものになったと考えております。

曹洞宗の国際布教の歴史は、1903年にハワイやペルーの日系移民を対象に始まりました。この頃から、禅の教えが海外に根を下ろし始め、次第に北アメリカ、ヨーロッパ、アジア各地に広がっていきました。先人たちは、幾多の困難を乗り越えながらも、海外における布教活動に情熱を注ぎ、禅の教えを現地の人々に深く根付かせました。その結果、今日では、令和6年12月1日現在、世界各地で134名の国際布教師が活動し、67か寺の海外特別寺院が登録されるまでに拡大しています。

これからの時代、宗門はますますグローバルな展開を見せることでしょう。海外の宗侶や信徒との協力を通じて、禅の教えがより多くの人々に届き、日々の生活に安らぎと指針を与えることを期待しています。また、宗門としては、文化や言語の違いを超えて、禅の普遍的な教えが全世界の人々に伝わるよう尽力して参ります。私たちが教えを伝えるだけではなく、異なる文化や価値観に対して理解を深め、共に歩んでいくことが重要であると考えています。

さらに、令和7年度には第10回北アメリカ・ハワイ檀信徒大会が開催される予定です。この大会は、日系移民の歴史と深く関わりがあり、移民たちが北アメリカやハワイに渡り、その地で曹洞宗の教えを受け入れ、地域社会に貢献してきた事実を再確認する貴重な機会となります。特に、日系移民がどのようにして曹洞宗の宗旨を信奉し、その教えがどのように地域社会に根付いたのかを振り返ることは、私たちにとって大きな意味があるものと考えております。この大会を通じて、移民たちの努力と成長の歩みを讃えるとともに、未来に向けた新たな展望を開くことを期待しております。

私たちは、改めてその歴史を振り返り、現地の国際布教師や宗侶たちと共に一丸となって、曹洞宗の教えを更に広めて参ります。また、この大会を契機に、曹洞宗の教えが多くの人々にとって、生活の中で活かされる存在となるよう取り組んでいく所存です。

国際布教の発展は、私たち一人一人の手の中にかかっています。これからも、曹洞宗の教え

が世界中で深く広がり、さらなる発展を遂げることを心より祈念いたします。そのために、皆様からの更なるご協力とご法愛をお願い申し上げます。皆様の信仰と支えがあってこそ、私たちの活動は成り立ちます。どうぞ今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。
拙文ではありますが、当職のご挨拶とさせていただきます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

合掌

新総監着任にあたり、ハワイ国際布教の現在までと今後の展望

国際布教総監　駒形宗二
ハワイ国際布教総監部

まず初めに、曹洞宗ハワイ国際布教総監部の新総監としてご挨拶できることを光栄に思います。この任を受けるにあたり、ハワイの国際布教に尽力してきた私の家族について深く考えております。私は、曾祖父である駒形善教、祖父駒形善秀、そして父であり師僧である駒形宗彦が代々引き継いできたハワイ国際布教総監の職を、第8代目総監として、足跡を辿ることになります。今後もその重責、謙虚さ、感謝の気持ちを忘れずにお受けいたします。

2024年4月30日、駒形宗彦前総監は、16年間にわたり総監の任を献身的に努め、退任いたしました。しかし残念なことに、そのわずか1か月後の6月7日に父は遷化いたしました。師が示したリーダーシップ、慈悲、そして導きは、これからも私の心に永遠に残り続けます。現在は総監の任を務めさせていただく感謝の気持ちと師を失った悲しみとが入り混じっておりますが、師が残したレガシーは、私の行く道だけでなく、ハワイにおける曹洞宗全体の道をも作ってきました。

2024年10月12日、ハワイ国際布教総監就任式典翌日には、前総監の本葬儀が執り行われました。私自身、総監としての職務に加え、両大本山布哇別院正法寺の国際布教師にも任命され、2005年より務めているアイエア太平寺の国際布教師も引き続き兼務しております。

これからの道のり：責務と遺産の調和

新たな門出を迎えるにあたり、希望と責任の

両方を感じております。成長する寺院コミュニティにおいて複数の役職を担い、進行中の多くのプロジェクトを監督することは、特に大きな課題です。アイエア太平寺は現在、数百万ドル規模の「アイエア曹洞宗アクティビティセンター」建設プロジェクトに取り組んでおり、寺院の物理的、精神的、両面の継続と発展に注力しています。このプロジェクトは2025年の完成を予定しており、新しい坐禅堂、シニアデイケアセンター、そしてコミュニティのための会議スペースが設けられる予定です。

このプロジェクトは「太平寺レガシー基金」の設立によって実現可能となりました。この20年の投資計画は、老朽化した建物の改修や新しい施設の開発など、重要な資本改善を支えるものです。この基金を通じて、私たちは100万ドルの資金を集め、教団の長期的な持続可能性を支援しています。今後は年間3％の利息を提供しつつ、私たちのコミュニティの未来において重要な役割を果たすことを期待しております。

両大本山布哇別院正法寺の持続と強化

両大本山布哇別院正法寺は、110年以上にわたる豊かな歴史と伝統を受け継いでいます。新たな役職に就くにあたり、このレガシーを未来の世代へと継承していくことの重要性を強く感じています。現在の檀信徒の皆様に奉仕を続けると同時に、寺院の長期的な持続可能性を見据えた計画を立てることが不可欠です。

私の優先事項の一つは、老朽化したインフラへの対応です。近年の大雨により老朽化した本堂と駒形ホールの屋根を修繕し、寺院が今後も安全で心温まる場として、世代を超えて多くのメンバーを迎え入れられるようにいたしました。今後を見据え、私は寺院の活性化に向けたマスタープランに取り組んでおり、その内容は以下の通りです。

- 寺院本堂の改修
- 成人デイケア施設の開設
- 武道場の再開
- 社交ホールと茶室の改修
- 訪問者向けのレストランおよびカフェの開設
- 新しい寺院図書館の設置
- 僧侶のための新しい住居の建設
- 坐禅と芸術のための新しいアクティビティセンターの建設

以上の取り組みが完了するまでには数年を要しますが、これらがもたらす可能性と、ハワイにおける曹洞宗の未来に大きな期待を抱いています。

ハワイにおける曹洞宗コミュニティの強化と育成

このような物理的なプロジェクトにとどまらず、ハワイ全土の寺院における精神的かつ共同体としての曹洞宗を生活の中に育んでいくことに尽力して参ります。ハワイの僧伽の強さは、仏教の教えに対する僧侶たちの献身によって支えられています。各寺院を定期的に訪問し、僧侶たちとオープンなコミュニケーションを維持しながら、必要に応じて支援と指導を行っていく予定です。また、2025年10月23日から26日にかけて、両大本山布哇別院正法寺にて開催される第10回北アメリカ・ハワイ檀信徒大会は、私が総監として務めさせていただく初めての行事となります。このイベントには、全米および世界中から曹洞宗の僧侶、檀信徒が集いますが、今回は従来の形式とは異なり、30以上の多彩なクラスやアクティビティを提供し、参加者自身が興味のあるものを自由に選べるように工夫する予定です。また、地元の曹洞宗寺院やハワイ・プランテーション・ビレッジといった歴史的な場所を訪れることで、ハワイの美しさと文化を

皆様と分かち合いたいと考えております。

教えと法を深める

これらの数々の発展の中で、私たちの最終的な目標は、曹洞宗の教えをさらに深めることです。2028年には、両大本山布哇別院正法寺において授戒会を開催する予定です。この授戒会を通じて、仏道への誓いを一層深めて、再確認いたします。授戒会修行までの間、私たちは教えの理解を深めることに注力し、特に坐禅と四摂法の実践に取り組んでまいります。

1. 布施（惜しみなく施すこと）
2. 利行（他者に利益をもたらす行い）
3. 愛語（慈しみのある言葉）
4. 同事（協力し、共に働くこと）

これらは単なる理想ではなく、私たちが互いに助け合い、共に歩むために実践できる行動そのものです。

ご支援のお願い

これらの意義深いプロジェクトの遂行、より一層の信仰への導きの中で、今後も変わらぬご支援を皆さまに謹んでお願い申し上げます。私たちの活動に対する積極的なご参加、ご支援、あるいはご自身の修行を他の方がたと分かち合うなど、皆さまの関わりがあってこそ、ハワイにおける曹洞宗は世代を超えて繁栄し続けることができると信じております。

皆さまの温かいご支援に心より感謝申し上げ、共にこの道を歩んでいけることを楽しみにしております。

大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禅師700回大遠忌ツアーの物語

ランドリー穏辰
グレートバウ禅モナスタリー・大願禅寺

この物語は、福井駅の大きな恐竜の標本の前で集まった時からではなく、ツアー参加者たちが2024年4月に飛行機で日本へ向かった瞬間でもなく、2023年にロサンゼルスの禅宗寺で行われた700回大遠忌予修法要からでもなく、ましてや瑩山禅師が現世を去った時からでもありません。この物語は、人びとが先祖を敬い、大いなる足跡に敬意を捧げたその瞬間から始まるのです。何世紀にもわたり、世代を超えて多くの祖師方を称え続けることが、どれほど尊いことでしょう。祖先や自然そのものへ敬意を捧げたいという心こそが、2024年4月23日、大本山總持寺で行われた大遠忌ツアーに多くの人びとを引き寄せました。

私の人生において、この物語は大いなる神秘と私の心にある仏性を敬うことから始まります。その瞬間は子供のころに訪れました。車の窓ガラスを美しくそして激しく流れ落ちる雨粒を見た時の「わあ！」という、心の中の感嘆の声でした。そして、思春期には人間として生きることの重みに意識が目覚めた時にも訪れました。人間として生きることは言葉にできないほど驚くべきことです。私は禅の修行を始めた当初に、広大な宇宙とのつながりを直感的に感じ、人生においてその仏性が本当に重要であることを感じました（もちろん今でも感じています）。どうすれば人間の心に花開かせることができるのだろうか？どうすれば真理を生きることができるのだろうか？そして、その真理をどうすれば

共有できるのだろうか？ その様な問いが私を導き、禅の修行を中心とした人生を築いてきました。そして今、私は法衣をまとい、法要でお拝をしております。

瑩山禅師は、人間としての成長や生きること、そして真理を共有するという問いを実現させた人物ですから、700回大遠忌法要を行ずることは自然なことです。

師の背中

私が大遠忌ツアーに参加した大きな理由は、師であるベイズ澄禅老師が焼香師を務めることも大きな一つでした。4月23日、總持寺に参集した日本国外の修行者、そして瑩山禅師の功徳から恩恵を受けた人びとを代表して焼香いたしました。

澄禅老師は、彼女の師である前角博雄老師を称える意味でも焼香師を務めることを熱望しました。前角老師は總持寺での修行の後、アメリカで法を広めた方です。彼は1950年代に「この地にしっかりと法の種を植え、決して絶えることのないようにする」という誓願を持ってロサンゼルスへ渡り、多くの偉大な僧侶を生み出し、多くの人びとを仏道へと導きました。

澄禅老師は日本国外の女性僧侶としては数少ない、あるいは初めて大本山總持寺で焼香師を務め、北アメリカ、そして世界中の女性修行者たちを代表することにも強い意義を感じていました。私にとっても老師がその役割を担う姿を見ることができ、素晴らしい経験ができました。彼女が導師を務める姿は「すべての存在が心に花開かせるための機会を得られるように」という菩薩の心を明確に表現していました。

大本山永平寺、大本山總持寺、そして東京にある曹洞宗宗務庁の短いツアーを振り返ると、魔法のような不思議な感覚を覚えます。何世紀にもわたって修行者たちが、その美しい心を育み、表現してきた両大本山を案内された夢のようなひとときは、私の心に幸福の印を残しました。両大本山を後に、バスへと戻る道のりは幸せな別れであり「終わり」についての素晴らしい教えでもありました。ひとつの経験を十分に楽しみ、ただ手放す。これは私たちの人生において多くの場面にあてはまる教えでしょう。

僧堂での90日間

私の師であるベイズ澄禅老師とベイズ法元老師、そして地域コミュニティの数名の仲間からの支えと共に、2024年春、私は岡山県にある洞松寺専門僧堂で3ヶ月間の修行を行うため日本を訪れました。そこで育まれている一つの原則と実践は「先人達への恩返し」です。数ヶ月間

日本で過ごすことができたのは、様ざまな人びとや存在（そして最終的には宇宙全体）からの多大な支えがあったからであり、私にできることはできる限りの明瞭さと優しさを開くことでした。

日本の専門僧堂での修行を考えるきっかけとなったのは、禅の修行が何であるか、そして何であったかについて自分の視野と実感を広げたいという思いからでした。私はこの10年間、オレゴン州の僧堂で生活し、修行してきました。それは美しく豊かなものでしたが、私の師や修行の場を形作る人びとの広い見識でさえ、限られた色彩しか提供できないことがあります。自分の法系から受け継いだ遺産に、より深く踏み込む可能性を信じ、私は日本のより伝統的な僧堂生活という水に身を浸したいと思いました。

今この瞬間の人生を祝う

洞松寺の短い修行期間での最大の気づきは、僧堂という共同体がまるで一つの身体のように動き、働いていたことでした。それぞれの人が全体に貢献するだけでなく、また、各々が独自の方法で禅の修行の本質を表現していたことです。

洞松寺での修行について多くの先輩方から指導を受けられたことは、ただただ嬉しいことでした。たとえその指導が、アメリカの大らかなスタイルのように親しみやすいものでなかったとしても、それは常に惜しみない寛大さに満ちていました。自分の寺院でしか修行したことのない私の無知が、徐々に親しみと自信へと変わり、この世界の小さな一隅での修行に対する感謝の気持ちは深まっていきました。

そして次第に、私のエネルギーの方向性は次の問いへと導かれるようになりました。

「私（そして私たち）は、この限られた時間の中で、どうすれば共に美しい人生を築くことができるのだろうか？」

僧堂での生活は、日常の中で敬意と思いやりの心を持つことがどれほど大切かを改めて教えてくれました。例えば、シャワーを浴びる前に偈文を唱え、三拝すること。5日ごとに剃髪を行い、仲間同士で頭を剃り合うこと。朝、早めに僧堂に向かい、坐浦を整えること。茶話会のために30杯のお茶を迅速かつ丁寧に用意すること。これらすべての行動が僧堂で共に修行することの大切さを表現しています。この真実をどのようにして明らかにするのでしょうか？それは、ただただ、坐禅、読経、剃髪、浴司、着替え、そして作務を共に行じることです。

敬意と思いやりの精神は、僧堂の中で常に続いています。たとえ個々の小さな信念が嫌悪、欲望、無知のさまざまな形に変化しても、僧堂はすべての人を乗せて他岸へ渡るのではなく、この美しく、常に崩れ落ちる世界の穏やかな水面や嵐の波を通して引き継いでいきます。

調和と誓いの中で共に生きることは人類に対する例ではなく、具現化することです。そして、この調和の実現は、どのような人生の形をしていても修行をする全ての人にとって現実のものとなります。たとえ“僧堂”と呼ばれる構造が周囲にあろうとなかろうと、です。

世界中に広がる禅の道

洞松寺の素晴らしい点は、世界中から修行者が集まることでした。北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパなど様ざまな文化圏から来た僧侶たちとのつながりを育むことができました。洞松寺で出会った人びとの「法を広く、全ての人に届けること」に尽力している姿勢は、瑩山禅師の広大な心の成果であると感じます。

洞松寺に新しく入る者、そこに既にいる者、そしてその後に来る者、全ての人びとが瑩山禅師の歩んだ道の新たな一歩を刻んでいるのです。

瑩山禅師のご生涯とご鴻業（4）

横山龍顯
駒澤大学仏教学部講師

④ 寺院相続システムの整備

嗣法儀礼が一元化されたことにより、瑩山門派では後継者の安定的な再生産が可能になった。これと並行して瑩山禅師は、寺院についても門派の僧侶のみによって相続されるシステムを整備した。本連載第2回でも紹介したが、元応元年（1319）12月8日、瑩山禅師は永光寺において「尽未来際置文（じんみらいさいおきぶみ）」を作成し、檀越（だんおつ）（支援者）と僧侶の関係性を、次のように定めている。

❶ 住職が交代した後も、永光寺僧侶と檀越は良好な関係を維持すること。

❷ 永光寺住職は瑩山禅師の法嗣から選定し、新たに選任された住職に対して、檀越は異議を差し挟まないこと。

これらの瑩山禅師が定めた制は、当時の曹洞宗寺院が抱えていた問題の解決を図ったものである。❶のねらいは、住職が瑩山禅師から交代しても、檀越が経済的支援を継続することにある。このような制度を設けたのは、中世当時の檀越は、寺院に対する支援者ではなく、僧侶個人の支援者である場合が往々にしてあったためである。檀越が僧侶個人の支援者であった場合、その僧侶が移錫（いしゃく）や遷化（せんげ）などで寺院を去った場合、寺院への支援は打ち切られ、存続の岐路に立たされることになりかねない。そのため、住職交代に伴う支援の打ち切りや減少を未然に防ぐことは重要な課題であった。

❶のような制を設けたのは、永平寺の経済事情をふまえていると考えられる。文永8年（1271）

から弘安4年（1281）にかけて、瑩山禅師は永平寺で修行生活を送ったが、当時の永平寺には、道元禅師の在世時に姿を見せていた京都の貴族社会関係者が姿を見せなくなっていた[1]。貴族関係者が永平寺を訪れていた頃は、そういった人々からの経済的支援も得られたであろうが、彼ら彼女らは、あくまでも道元禅師個人に対する支援者であり、永平寺という寺院の支援者ではなかった。それゆえ、道元禅師が示寂した後には、永平寺を訪れることもなくなり、支援の手はおのずと引かれていった。道元禅師の示寂後も檀越として永平寺を支援したのは、道元禅師を越前へ招聘した波多野氏のみであったと考えられる。つまり、瑩山禅師が上山した当時の永平寺は、道元禅師が住持を務めていた頃と比べれば、寺運は衰退の一途をたどり、再興の手がかりを見出すことができない状況に陥っていたと考えられる。永仁元年（1293）に義介禅師が永平寺を出て、加賀の大乗寺へ移ったのも、これ以上、波多野氏からの支援を望むことはできないと判断したことが一因になっていると考えて差し支えないだろう[2]。

衰退の一途をたどる永平寺を目の当たりにした若き瑩山禅師は、寺院を相続していくうえで、住職が交代したとしても、檀越が支援を継続することの重要性を痛感したはずである。❶の制は、まさに永平寺での反省を踏まえたものであると見られる。

❷は、住職の選任権を僧侶のみに認め、檀越には住持の選任権を認めない制である。本来、檀越は寺院の経済的支援者であるため、住持の人事に対して強力な発言権を有していてしかるべきである。「尽未来際置文」が檀越の選任権や発言権をまったく認めていないのはなぜだろうか。ここには、大乗寺をめぐる瑩山禅師自身の苦い経験が反映されていると考えられる。

瑩山禅師が大乗寺から永光寺へ移錫する際に、後継者として指名したのは恭翁運良（1267〜1341）という臨済宗の僧侶であった。恭翁は臨済宗の僧侶であったが、瑩山禅師は弟子の明峰素哲（1277〜1350）と峨山韶碩（1276〜1366）を恭翁に参学させ[3]、恭翁が大乗寺の首座となった際には、「余（瑩山禅師）に参ぜんと欲する者は、首座（恭翁）に参ぜよ[4]と述べたとされており、両者は非常に厚い信頼関係で結ばれていたとみられる。瑩山禅師が大乗寺を去る際に、恭翁を後継者に指名したのは、恭翁を信頼していたことはもちろんであるが、瑩山禅師の弟子のなかに、住持をつとめるほどの力量を備えた人がまだいなかったという事情も存したと考えられる。

瑩山禅師は、大乗寺の新住持となった恭翁に対して、義介禅師・瑩山禅師が守ってきた道元禅師の宗風を引き続き挙揚することを期待していたはずであるが、恭翁が取った行動はそれを裏切るものであった。すなわち、恭翁は大乗寺住持となるや、大乗寺の臨済宗化を始めたのである[5]。

臨済宗化する大乗寺を見て、瑩山禅師は大乗寺檀越の冨樫氏に対して、住持の交代を申し入れたようであるが、認められることはなかった[6]。臨済宗化する大乗寺を見て、守ってきた伝統がいとも簡単に崩れ去ってしまうことのはかなさや、同一門派の僧侶が寺院を継承していくことの重要性を痛感すると同時に、檀越が住持の人事権に対して発言権を有する限り、同一門派による安定した寺院相続は不可能であることを身にしみて感じ取ったことは疑いない。それゆえ、❷の制を定めたのである。

瑩山禅師が「尽未来際置文」に❶と❷の制を定めたことにより、永光寺は瑩山門派のみが住持をつとめ、住持が交代したとしても、檀越か

ら変わらぬ経済的支援を受けることが可能となった。つまり、永光寺は、永平寺や大乗寺よりも、はるかに安定した寺院相続システムを獲得したのである。

現代の日本では、基本的に住職が交代しても宗派が変わることはなく、檀信徒も変わらずに支援を継続することが当たり前となっている。現代的な檀信徒制度は、直接的には江戸時代の宗教政策の名残であるが、曹洞宗に関しては、その淵源を鎌倉時代の瑩山禅師にまでさかのぼると見ることもできる。

⑤ 本山護持の精神を育む

瑩山禅師の前半生は、諸師参学の日々であった。永平寺の懐奘禅師・義介禅師・義演禅師、宝慶寺の寂円禅師等に学び、その後、阿波の城万寺（城満寺とも）住持となってからも、大乗寺に錫を移した義介禅師に参学している。彼の地で接化に励んだ後、義介禅師の法を嗣いでからの後半生は、加賀・能登を拠点とし、宗教活動を展開した。

加賀・能登において瑩山禅師が開創した寺院は、じつに7ヶ寺に及ぶ。この7ヶ寺に大乗寺を加えた8ヶ寺を、瑩山禅師は自身の「遺跡寺」と定めている[7]。興味深いのは、8ヶ寺に序列と機能分担が設けられている点である。

序列の頂点に位置するのは永光寺で、永光寺の住持になることができるのは瑩山禅師の法嗣だけである。ほかの寺院は、法嗣ではなくとも住持になることができるが、住持になることが認められたのは、瑩山門派の人のみである。そして、機能分担について見てみると、たとえば、加賀の放生寺と能登の總持寺は「僧所」と位置づけられており、修行に専念する寺院とされる。ほかにも、宝応寺は尼寺、光孝寺は独住所といったように、寺院ごとに期待される機能が異なっている。

機能分担を設けつつ寺院を分散させたのは、3つの目的があったと考えられる。

- α 瑩山門派（曹洞宗）の影響圏を拡大させるため。
- β 不測の事態（自然災害・疫病の流行・戦乱など）が発生した時の被害を最小限に食い止めるため。
- γ 修行者たちが8ヶ寺に住する様々な指導者の下で研鑽を積み、力量を養うため。

このうち、門弟たちにとって魅力的に映ったのはγであろう。様々な師家から指導を受けることが可能になるため、ある師家のもとでは機縁がかなわずとも、同じ瑩山門派の別の師家のもとでは、悟入の手がかりを得られる可能性が残されるためである。さらに、研鑽を重ねて力量を磨き、瑩山門派の法嗣と認められたならば、将来的に永光寺住持の可能性が開けることにつながる。門弟たちの視線の先には、拠点寺院である永光寺が常にあり、本寺の護持という意識が醸成されていった。

そして、瑩山禅師の遺跡寺は、どこかで住持などに欠員が出た場合には、瑩山門派から欠員を補充するというネットワークシステムを採用していたため、門派の結束を固めることにもつながっていった。

また、永光寺は瑩山禅師から嗣法した順序にしたがって住持をつとめることが定められているが[8]、これが後代には、瑩山門派の僧侶が輪番で住持をつとめる「輪番住持制」へと継承されていく。

現在の曹洞宗では、永平寺と總持寺が大本山となる両本山制をとっているが、永平寺・總持寺ともに護持会が組織され、その維持継承のために努力している。こうした曹洞宗における本山護持の精神を育んだのもまた、瑩山禅師であ

ったといえる。

⑥「曹洞宗」の教義の確立

瑩山禅師は「教団の祖」と見なされることが多いため、思想的に注目されることは少ないが、思想にもおおいに注目する必要がある。

先学が指摘しているように、瑩山禅師の思想を理解するうえでもっとも重要なポイントは、「道元禅師の教えを補完した」という点である[9]。②でも述べたように、この態度が、瑩山禅師の著述の全体にわたって一貫している。以下においては、『伝光録』を中心に、瑩山禅師がどのように道元禅師の思想を補完しようとしたのかを述べておくこととしたい。

道元禅師の『正法眼蔵』や『永平広録』は、「悟りのありよう」や「そのなかでいかに修行していくか」を説く書である。道元禅師の言葉を借りるならば、「果位の修証」[10]が中心的な内容となっている。

いっぽう、瑩山禅師は『伝光録』において、『正法眼蔵』が説く「悟りのありよう」を享受するための道程、すなわち「悟りへの道」を示そうとしたといえる[11]。それゆえ、瑩山禅師は、道元禅師が詳説せず、仮に「方便」として示した「悟りの体験」と、その体験を得た時に垣間見られる「悟りの境涯」[12]を積極的に述べているのである。例として、『伝光録』の「闍夜多尊者章」を以下に引用してみよう。

> 諸仁者、本心を見得せんと思はば、万事を放下し、諸縁を休息して、善悪を思はず、且らく鼻端に眼を掛て本心に向て看よ。一心寂なる時、諸相皆尽く……。若し是の如くならば諸仏と同じかるべし。[13]

ここでは、どのようにすれば悟りの体験を獲得することができるか、そして、悟りの境涯とはどのようなものかが説かれている。引用文中の「本心」は仏性を意味しており、自身の仏性を知りたいのであれば、あらゆる思い（万事）と思いの対象（諸縁）から脱却し、「善」と「悪」といった虚妄な分別（言葉であれこれ考えること）から離脱することが必要であると述べる。そのための実践として、「鼻端に眼を掛」る、すなわち、只管打坐の坐禅修行を行うことで、自身の仏性を見るという悟りの体験を獲得することができると述べる。

さらに、悟りの体験のみを語るのではなく、悟りの体験を得たときに現前する悟りの境涯が、「一心寂なる時、諸相皆尽く」と表現されている。一心とは、いかなる相対性にも還元することのできない絶対の真理（それは自身の仏性でもある）であり、自己と真理が不一不二であることを体得し、虚妄な分別が寂滅した境地の静謐さが表現されている。引用文のように、分別が寂滅したところに悟りの体験が訪れ、この体験を通して垣間見えるのが悟りの境涯であることを、瑩山禅師は『伝光録』において、懇切丁寧に繰り返し説明する。

そして、悟りの境涯を説明した「一心寂なる時、諸相皆尽く」という句は、宋代曹洞宗において黙照禅を大成した宏智正覚（1091〜1157）の語であるが[14]、瑩山禅師は悟りの境涯を説明するにあたって、この箇所以外でも宏智の語を多用している。『伝光録』において宏智の語が多用されることは、これまでほとんど指摘されていなかったため、注意しておきたい。

このように見てみると、『伝光録』における講義の特色とは、道元禅師が詳説しなかった「悟りへの道（因位の修証）」を明らかにしたことと、悟りの境涯を、曹洞宗の先達である宏智正覚の言葉を用いて解説したことに求められるであろう。

もちろん、悟りへの道や悟りの境涯を説くこ

とは、禅宗一般において行われることで、珍しいことではない。しかし、瑩山禅師が禅宗の基本思想を説いたことは大きな意義がある。なぜなら、道元禅師は禅の基本思想を説かず、それを発展させ独自の解釈にもとづいた思想を説いたからである。道元禅師の思想的な魅力は、その独自性にあることは疑いないものの、道元禅師もまた、留学した南宋において宋代禅の思想を徹底的に学んだからこそ、独自の見解を提示することができたと瑩山禅師は理解していたのであろう。それゆえ、瑩山禅師は『伝光録』において禅の基本を説き示したと考えられる。

したがって、瑩山禅師によって、宏智正覚の曹洞禅（黙照禅）にもとづいた禅の基本思想が説かれたことは、悟りへの道が開かれたと同時に、道元禅を理解するための入口も開かれたことを意味している。

『伝光録』の講義が行われるまでの道元門派においては、道元禅に対する統一的な解釈や、解釈を行うための教義的な基礎を固めることができていなかったと思われる。そこへ、瑩山禅師が黙照禅の基本思想を導入したことにより、瑩山門派は教義の思想的基盤を獲得することができたのである。

そして、『伝光録』には修行者を励ます言葉に満ちあふれていることも忘れてはならない。たとえば、次のような言葉に出会うことができる。

> 今日も頻りに弁道し、子細に通徹せば、釈尊直に出世なり。（摩訶迦葉章）[15]
>
> 昔し厚く善根を植え、深く般若の良縁を結ぶ。之に依て大乗の会裡に集まる。実に是れ迦葉と肩を並べ、阿難と膝を交ゆるが如し。然れば一日賓主たりとも、終身すなはち仏祖たらん。（商那和修章）[16]
>
> 人人悉く是れ道なり。事事都て心ならざることなし。（伏馱密多章）[17]
>
> 実に初心の如くせんに、誰か道人と為らざらん。（龍樹章）[18]

『伝光録』の講義において、禅の基本思想を説示しつつ、仏祖たちと同じように修行に励んだならば、君たちにも必ずや分かる日が来ると、修行者たちを激励し続けたことで[19]、門下の中からは悟りを開く人が続出していった。たとえば、峨山韶碩は『伝光録』提唱の翌年（1301年）に開悟し、明峰素哲は提唱の翌々年（1302年）に開悟している。

ここからすれば、『伝光録』の登場によって、瑩山門派では「悟りの再生産」が可能となったのである。悟りを開き、禅の教えを体得した人は、そのまま門派の後継者候補となるが、後継者候補の人数が増えたことも、曹洞宗の教団化に果たした意義はきわめて大きいであろう。

「③ 安定的に後継者を再生産できる仕組みの整備」において、瑩山禅師が嗣法儀礼を整備したことを述べたが、それは、『伝光録』に見られるような瑩山禅師の指導により、悟りを開く弟子の数が増加したことによると考えられよう。

曹洞宗を「教団化」させるためには、組織体制のみが整備されるだけでは不十分である。教団の理念たる教義・思想をも整備することで、車の両輪を成すように教団化は達成されるのである。

ここまで瑩山禅師の思想について概観したが、瑩山禅師以降の曹洞宗の思想についても見通しを提示しておくことにしたい。

瑩山禅師の膝下に明峰素哲と峨山韶碩が輩出されたことで、曹洞宗教団は急速に教線を拡張する。門下の人々が教義の拠り所とした利用したのは、『伝光録』と『宏智録』であった。さらに、門下の人々の興味は、「悟りへの道」から「悟りの瞬間」へと移行していき、「悟る」ことが明確に目的化されるようになっていく。

こうした思想は南北朝時代から江戸時代初期にかけて流行し、「公案禅」（中国宋代の公案禅とは異なる）と呼ばれている[20]。公案禅が確立して以降、『伝光録』は顧みられることがなくなり、もっぱら『宏智録』や『禅林類聚』といった中国禅宗文献が重宝されるようになる。

つまり、中世曹洞宗の思想史は、①「道元禅師から瑩山禅師へ」→②「瑩山禅師から公案禅へ」という２つの大きな潮流を想定して考察することが有効であると考えられる。

以上をまとめるならば、瑩山禅師は道元禅理解への筋道を示すと同時に、瑩山禅師以後の「公案禅」が興隆する端緒を形成したということができる。この意味において、瑩山禅師が曹洞宗の思想史に与えた影響力の大きさは、再評価されるべきであろう。

小結

以上、６つの項目に分類して瑩山禅師が曹洞宗に果たした功績を概観してきた。瑩山禅師は、道元門下の人々が直面していた種々の難問に対して、刷新的に対応しつつ、思想・儀礼の両面に基盤を与えることで、組織としての体制を整え、曹洞宗の教団化を成し遂げたのである。こうした偉業の根底にあったものは、道元禅師の法灯を絶やすまいという報恩の精神であったに違いない。もし、瑩山禅師が現れなければ、曹洞宗教団は現代までその命脈を保つことはできなかったであろう。

人口減少社会に突入した日本において、曹洞宗寺院は大きな岐路に立たされている。現状を打開し、さらなる一歩を進めるための改革を余儀なくされることと思われるが、難局に対して果敢に立ち向かい、すぐれた方向性を示した瑩山禅師の姿勢に学ぶことは数多くあるように思われる。

また、現代においては海外諸国にもZENが広がり、それぞれの地で定着していっているが、海外諸国には、また異なる現代的状況が存することであろうと想像する。小文に紹介した瑩山禅師の姿が参考になるところがあれば幸甚である。

---

1. 石川力山「三代相論再考―道元僧団の社会的経済的背景を中心として―」（『宗学研究』31、1989年）172頁。

2. 永平寺に新たな支援の手が差し伸べられるのは、正和3年（1314）に宝慶寺住持の義雲禅師が第5世として晋住し、新興地頭である伊自良氏（宝慶寺の檀越）の援助が開始されるのを待つことになる。

3. 佐藤秀孝「恭翁運良の伝記史料―『仏林恵日禅師行状』と『仏林恵日禅師塔銘』の訓註―」（『駒澤大学禅研究所年報』12、2001年）89頁。

4. 注（23）論文、107頁、原漢文。

5. 注（23）論文、92頁。

6. 「山僧遺跡寺寺置文」（注（19）書、12〜13頁）参照。

7. 注（26）参照。田村航也氏が指摘しているように（「初開道場　四国・城満寺の開山」、2024年6月6日付「仏教タイムス」）、瑩山禅師の最初の住職地である城万寺は、遺跡寺には含まれていない。瑩山禅師が大乗寺へ移錫して以後の城万寺がどのような経緯をたどったのかは、不明点が多く、今後の研究課題である。

8. 「尽未来際置文」（『瑩山禅師御遺墨集』、大本山總持寺、1974年、第9折）参照。

9. 池田魯參「天台教学から道元・瑩山学へ」（『駒澤大学仏教学部論集』43、2012年）。

10. 『正法眼蔵』「安居」巻（『道元禅師全集』第2巻、春秋社、1993年、236頁）。

11. 拙稿「新釈 瑩山禅師伝（25）」（『跳龍』75-7、2023年）42頁。

12. 道元禅師は「悟りの体験」や「悟りの境涯」について、『学道用心集』（『道元禅師全集』第5巻、春秋社、1989年、36頁）や『弁道話』（注（30）書、474頁）において、方便的に言及するが、積極的に説示することはしない。

13. 注（3）書、126～127頁。

14. 『宏智禅師広録』巻6「明州天童覚和尚法語」（『大正新脩大蔵経』第48巻、76p）。

15. 注（3）書、23頁。

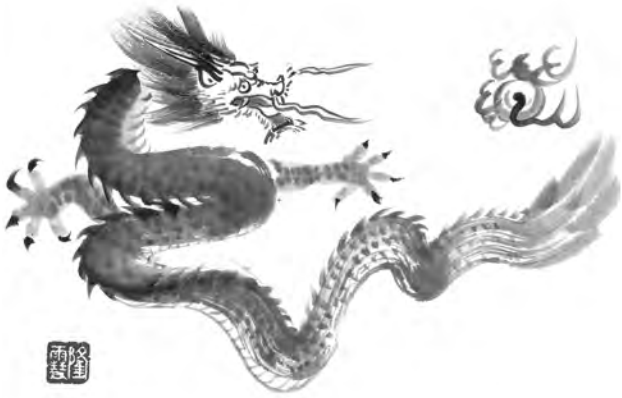
16. 注（3）書、35頁。

17. 注（3）書、67頁。

18. 注（3）書、103頁。

19. 修行者たちへの激励は、道元禅師の『正法眼蔵随聞記』でも見られる。

20. 注（31）拙稿参照。



坐禅への脚注集（28）アレクサンダー・テクニークから坐禅を見ると……（3）

藤田一照

英語には Taking root to fly という表現がある。（上に向かって）飛ぶために（下に向かって）根づく、という意味である。メレディスさんは言葉で示唆をしながらわたしの足やすねやももに触れることを通して、そういうことが起こるように、手助けしてくれたのである。坐禅の実践や指導において、われわれはともすると上半身にばかり注意を向けてその部分だけの外的な形にばかりこだわる傾向があるが、実はそれ以前にそれを乗せている下半身をどのような質で坐布団や坐蒲のうえに据えているかということにもっと気を配る必要がある。そしてグラウンディングを深める手助けとなるような言葉のかけ方や触れ方を開発していかなければならない。上半身はしっかりとグラウンドしている下半身に支えられて初めて、深くリラックスすることができ、バランスを取りながら上に向かって伸びていけるのだ。

次に、メレディスさんがやったのは、アレクサンダー・テクニークの基本中の基本である、頭を頚椎の一番上（首の最上部）にバランス良く乗せるというレッスンである。まず、立った状態で。彼女は「首を楽で自由に……」というような言葉かけをしながら両手でわたしの後頭部やおでこ、背中や胸などに触れて、頭が首の上でバランスが取れているあり方をわたしに伝えようとした。「たいていの人は頭と首をひとまとめに考えているけど、良い動きのためには別々だと理解した方がいいわ。頭はだいたい耳

たぶの高さくらいのところで首の上に乗っかっているの。今まで思っていたところよりだいぶ上にあるでしょ。頭を少し前や後ろにゆっくり動かしてみて。その時、頭と首の関節（環椎後頭関節）だけで動かすように注意して。首ごとまげてないかどうか気をつけてね。あるかないかくらいのほんの小さな動きになるでしょ」。頭の重心は一番上の椎骨に乗っかっている頭蓋骨の支点よりも前にある。だからそのままだと、頭は常に前に傾く傾向がある（居眠りしている人がコックリコックリ頭を前に傾けているのはそのせいだ）。頭自身の重さによって前に傾こうとする動きに対してバランスを取るためには頭の後ろで下に引っ張る必要がある。後頭部の奥深いところにあって、そのために働いているのが後頭下筋と言われている深層筋群である。つまり、頭は首の骨の一番上（アレクサンダー・テクニークの人たちはしばしばそこを「トップジョイント」と呼んでいる）で、そこを支点として頭の重さと後頭下筋の引っ張りがバランスを取り合って、あたかもヤジロベーのようにゆらゆらと乗っかっているのである。アレクサンダー・テクニークでは動きの中でこの微妙なバランスを確保することが非常に大切なこととされている。頭が後頭下筋の繊細な動きによってうまくバランスを取っていると、首と背中の筋肉が長くなり、胴体全体が緩む。さらには肋骨が自由になって呼吸のメカニズムが活性化されていく……。

道元禅師が『永平清規 辨道法』のなかで坐禅の姿勢に関して「頂寧脊骨相い拄えて端直にし」とか「項をもって背に差うことなかれ」と強調して書いてあるのはこういう事実が背景になっているのである。正身端坐するためにはその条件をどうしても満たさなければならないのだが、われわれは繊細な後頭下筋の上層にあるより強力な表層筋肉群を収縮させて頭を余計に後ろと下に引っ張り込む傾向がある。だからその悪い癖が発動しないようにそれを抑制する必要があるのだ。

アレクサンダー・テクニークの教師がしばしば後頭部に手を添えるのは、この頭を後ろと下へ引っ張り込む無意識の動きが出ないように、頭の状態が今どうなっているかをフィードバックしてくれているのである。そして、この動きを発動させることなく、「首が楽で自由なままで、頭が前へ上へいくようにして」、立ったり、坐ったり、歩いたりすることができるような新しい動き方を見つけ、育てる助けをしてくれているのだ。メレディスさんもそういう働きかけをして、わたしが立った状態で、頭がなるべく高いところでバランスをとれているよう導いてくれた。興味深かったのは、わたしの頭に手を添えているときの彼女自身もまた「首が楽で自由なままで、頭が前へ上へいく」というあり方で立っていなければならないのだと言っていたことだ。教師自身がまずそういうあり方で存在していなければ、手を通してそのクオリティを生徒（アレクサンダー・テクニークではレッスンを受ける者をそう呼んでいる。レッスンは治療ではなくあくまでも教育だという立場なのである）に伝えることはできないということなのだろう。これは坐禅を指導する立場の者にとってとても大事なことを示唆している。相手の坐相を手で触れて正そうとするときの自分の姿勢がどういうあり方をしているかがまず問われなければならないということを意味しているからだ。

さて、立った姿勢でのレッスンが終わると彼女は、「じゃあ、そのままの感じで部屋を歩いてみて」と言いながら、わたしの後頭部に手を添えたまま、ゆっくりとわたしを前に押し出すようにして歩くように促した。そして手を放し

て、「いろいろな方向に向きを変えて自由に歩いてね。どんな感じがする？」「なんだかちょっと背が高くなったような……。あと、頭の動きに足がついてくるような感じです」「グッド」。

そうやって歩いていると、「じゃあ、あなたが坐禅の時どういうふうに坐っているか見せてくれる？」と言われたので、坐蒲を置いてその上に坐禅の格好で坐ろうとしたら、すかさず後頭部に手を添えられて、「首が楽なままで、背中を長く、股関節から膝が離れるように……」という指示がやってきた。坐蒲の上に尻を乗せるまでのプロセスももうすでに坐禅の始まりとして心して行わなければならないのだ！　立位から坐禅へ、坐禅から立位へ、そういった坐禅の前後の姿勢の移行もまた坐禅相応のあり方でなされるよう指導する必要がある。そこまで射程を広げて坐禅が参究されなければならない。

さて、半跏趺坐になって坐ると、メレディスさんは立った時にやったようにわたしの頭や首、胸郭、背中、腰、骨盤などに軽く触れて、手で「聴診」しているようだった。「坐骨と両膝でできている三脚の上に胴体がバランスを取りながら上へとあがっているように……。そう、あなたの場合はよくあるように腰椎を前に押し込んで腰を無理に反らせていないからいいわね。ん〜、でも、どちらかというと胸をがっちり固めすぎているわ。胸郭の下部をそんなに持ち上げないでからだの前側で休ませあげて。そう、背中の真ん中あたりが少し後ろへ動くでしょ。胸郭は肋骨で囲まれているから全然動かないと思っているかもしれないけど、実は力んでいなければ柔らかく変形するのよ」。そういって彼女はわたしの胸や脇や背中のいろいろなところを指で押してきた。「リラックスしてこのプッシュを柔らかく受け入れてみて。そう、そう。思ったよりずっと柔らかくて、前後、左右、上下に自由に動くでしょう？　胸郭だけに限らないけど、坐禅の時はからだのどの部分も動いてはいないけど楽に動ける状態でいなけりゃね。拘束的に固めないようにしてじっとしているっていうことが大事」。この指示の最後の部分、彼女の使った英語は be movable without moving, be still without holding だった。たいそう含蓄のある言葉であるとわたしは思った。

彼女は持参した全身の骨格標本を示しながら、「この背骨の形を見ればわかると思うけど、からだの重さは太い背骨の前の方で支えるようにデザインされているの。それを思ってみて。背骨の後ろ側じゃなくて前側で重さを引き受けているって」。実際そう思ってみると、背中側が緩んでほんの少し伸びたような感覚が生まれた。

坐禅の姿勢で坐っているわたしに向かって彼女がこう言った。「自分にこう質問してみて。『今わたしは、どんな余計な力みや緊張を手放すことができるだろうか？』と。……バランスが精妙になって坐りが楽になればなるほど、息がますますのびやかになっていくし、いのちがますます生き生きしてきます。……環境との関係において自分が自由であるということは、『いかなることに関しても準備はしていないけれども、どのようなことに対しても応答する用意ができている』という状態でいるということです。……わたしが言っていることわかるかしら？」

この最後の二重カギ括弧のところ、元の英語は you are prepared for nothing and ready for anything である。prepared も ready も辞書的な意味では似通っている（どちらも「準備できている状態」のことを意味する）ので、文字通りでは「何に対しても準備していないが、すべてに対して準備できている」という意味になるから、なんとも「禅的」な謎めいた表現である。わたしはこう言われて、「ある特定のことに対して

それを予期して構えていると、いざそれとは違うことが起きたときに、咄嗟に対処できないということなのだろう」と理解した。そして「次の瞬間に新しく仕事をすることのできる筋肉は、今、休んでいる筋肉だけである」という、野口体操創始者の野口三千三先生が繰り返しおっしゃっていた言葉を脳裏に浮かべた。今、休んでいる筋肉が、多ければ多いほど、次の瞬間の動きの可能性が豊かなものになっていくのである。メレディスさんの言ったことをそういうふうに解釈してみたのである。それから武術では、相手のどのような動きに対しても即座に対応できるような、どこにも偏り（スキ）がなく、かつ自由度がきわめて高い姿勢のことを「自然体」と呼んでいる。この自然体のことをわたしがかつて少し習った剣術の流派（鹿島神流）では「無構え」と言っていた。「構えが無いという構え」という意味なのだろうが、このコンセプトもメレディスさんの言ったことと通じるところがあるように思った。

メレディスさんにこう言われたわたしは、「余計な力みや緊張はどこにあるのかな？」という問題意識を持って、坐禅の姿勢で坐っている自分のからだの中を改めて感じようとしてみた。そして、からだのいくつかの場所にあるように感じられた束縛や圧迫や抵抗、余計な力みを「手放そう」としてみた。具体的には、手足の位置を微妙に変えたり、重心の位置を少し前後左右にずらしてみたり、からだをゆっくり揺らしてみたりして、もっと楽に坐ることができるように工夫してみたのである。それと、もっとほぐしたいところがある場合、わたしがよくやるもう一つのやり方はそのほぐれて欲しいところへ息を流すというかその場所で息を吸い、吐くようなイメージを描くことなのだが、そのときもそれをやってみた。

坐禅に関して、客観的に正しい坐り方が既に理想的モデルのように外側に存在していてそれに他律的に自分を合わせていくのではなく、自分に合った良い坐り方を「その都度、その時、その場で」自分のからだの感覚と相談しながら「探していく」というアプローチをとるべきではないかというのが現在のわたしの考えだ。身体各部の「収まりどころ」を頭で始めから決めつけるのではなく、からだに聴いて丁寧に探すのである。だから、できるだけ「静かに、ゆっくり、ゆったり、ゆるやかに」探していく、極端なことを言えば一回の坐禅を四十分とするならその四十分を全部使って、探し続けたっていいのではないか。正身端坐を「骨組みと筋肉でねらう（内山興正老師の表現）」ことの実際というのは、カチッと決まった「百点満点の正しい坐相」を最初にモデルに合わせて作ってそれを坐禅のあいだずーっと死守するというようなことではなく、「今は未知である正しい坐相」そのものをからだに聴きながら誠実に新鮮に探索していく、そういう辛抱強い探求のプロセスの全体を指すのではないだろうか。それはあたかも、弦をはじいて響いてくる音に耳を澄ませながら、正しい調べに向かって無限に（＝どこまでも）調律していくような営みと言えるのではないだろうか。そこでは粗雑に動きすぎたり、性急に急ぎすぎたり、焦って速すぎたり、といったことは戒められなければならない。そうすることでからだから生起してくる微細、微妙な感覚を感じ取ることができなくなるからだ。

国際ニュース

ヨーロッパ国際布教総監部現職研修会
日程：2024年10月4日〜6日
会場：禅道尼苑（フランス共和国ブロワ）

秋季ハワイ国際布教師連絡会議
日程：2024年10月11日
会場：両大本山布哇別院正法寺（ハワイ州ホノルル）

北アメリカ曹洞禅連絡会議（総監部現地法人ASZB総会）
日程：2024年10月23日
会場：両大本山北米別院禅宗寺（カリフォルニア州ロサンゼルス）

北アメリカ国際布教総監部現職研修会
日程：2024年10月23日・24日
会場：両大本山北米別院禅宗寺（カリフォルニア州ロサンゼルス）

南アメリカ国際布教総監部現職研修会
日程：2024年11月6日・2025年1月10日・3月11日
開催方法：オンラインビデオ会議サービス「Zoom」

ヨーロッパ国際布教総監部主催協議会（第１回）
日程：2024年11月29日
会場：オンラインビデオ会議サービス「Zoom」

ハワイ梅花流特派講習巡回
日程：2025年2月14日〜22日
会場：5教場

春季ハワイ国際布教師連絡会議
日程：2025年2月23日
会場：両大本山布哇別院正法寺（ハワイ州ホノルル）

ヨーロッパ国際布教総監部主催協議会（第２回）
日程：2025年3月6日
会場：オンラインビデオ会議サービス「Zoom」

曹洞禅ジャーナル　法眼（年2回発行）
発行所　曹洞宗国際センター
Soto Zen Buddhism International Center
1691 Laguna Street, San Francisco, CA 94115　Phone: 415-567-7686　Fax: 415-567-0200